

生活型福祉施設のケアワークの専門性とソーシャルワーク

ー 生活型福祉施設へのアンケート調査を通じてー

○ 龍谷大学 氏名 土田美世子 (会員番号 1884)

龍谷大学 氏名 高松 智画 (会員番号 1859)

キーワード：生活型福祉施設、ケアワーク、ソーシャルワーク

1. 研究目的

本研究は、生活型福祉施設でのケア項目に焦点をあて、ケアワークとソーシャルワークとの関係を明確にし、生活型福祉施設の支援の専門性について明らかにすることである。生活型福祉施設で利用者の権利擁護を目的に実施されるソーシャルワークは、相談機関で実施される構造とは違い、利用者の生活支援を通じて実施されることが多い。このことを山辺は「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」の枠組みでとらえている¹⁾。効率重視の社会状況の中で、施設は利用者の生活を守り自立を支えるだけでなく、家族、地域社会からのニーズにも応え、様々な役割・機能を求められている。その一方で、施設のワーカーの専門性については明確でない部分も多く、職務に対して社会的に正しい評価を受けていないと考える。本研究では、生活型福祉施設ワーカーの専門性が、勤務経験によりどのように構築されていくかについて考察した。

2. 研究の視点および方法

勤務経験の異なるワーカー21名へのインタビュー調査から、生活型福祉施設のワーカーの専門性に関わる内容、55項目をピックアップした。これらの項目の習熟度について生活型福祉施設のワーカーに対してアンケート調査を依頼し、勤務経験により専門性の獲得がどのように異なるかについて検討した。

(1)調査対象：近畿2府6県の生活型福祉施設のうち、児童福祉施設151か所、障害者支援施設333か所、高齢者福祉施設516か所、計1000か所を対象とした。

(2)調査時期：2017年1月20日、23日に調査票を送付した。

(3)調査方法：郵送法による質問紙調査、自計式。調査票は、各施設長宛てに3セット送付した。調査の趣旨を説明し、新人・中堅・ベテラン職員に、それぞれ回答してもらいたい旨を文書で依頼した。回答は、同年2月末までに、回答した職員毎に同封の返送用封筒で返送を求めた。

(4)調査内容：①生活型施設のケアの専門性について：ケアの専門性に関わる55項目に対して「全くそう思わない」から「非常にそう思う」の5件法で回答を求めた。

②回答者のフェイスシート項目：回答者の年代、性別の他、専門性の構築に関わる可能性のある、勤務年数、職名、保持する資格等についてたずねた。

(5)分析方法：調査票の集計、分析にはIBM SPSS Stastics24を使用した。

3. 倫理的配慮

本研究は、「一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針」を遵守して実施した。調査の趣旨と倫理上の配慮について調査票の表紙に記載することで回答者に提示した。調査票の集計においては、匿名性を担保するとともに、データの扱いには細心の注意を払った。

4. 研究結果

(1)回収率：送付した調査票は、1000施設×3通、計3,000通であった。回収できたのは、児童福祉施設246(回収率54.3%)、障害者支援施設448(回収率34.0%)、高齢者福祉施設573(回収率37.0%)、全体では1,267通、回収率42.26%であった。

(2)勤務経験ごとの人数：回収した調査票のうち、不備があるものを除いた1,262を分析に用いた。本調査では、勤務年数により、ケア項目の専門性がどのように獲得されているかを確認することを目的とする。勤務経験ごとの人数は、新人(勤務3年以内)378(30.0%)、中堅(10年以内)460(36.5%)、ベテラン(11年以上)417(33.3%)、無回答7(0.6%)であった。

(3)勤務経験(新人・中堅・ベテラン)と55項目の関連の検証

55項目を内容により12の専門性カテゴリーに分類した。このカテゴリーごとに回答を加算し、勤務経験毎に集計し平均を得た。平均について勤務年数による3群を独立変数、12項目の専門性カテゴリーを従属変数として、1要因分散分析を実施した。その結果、「利用者理解： $F(2,1238)=41.096, p=0.00$ 」「支援の一貫性： $F(2,1236)=5.229, p=0.005$ 」「社会資源との連携： $F(2,1233)=49.627, p=0.00$ 」「同僚への支援： $F(2,1243)=53.555, p=0.00$ 」「同僚へのSOS： $F(2,1247)=12.043, p=0.00$ 」「利用者へのアカウントビリティ： $F(2,1243)=30.276, p=0.00$ 」「職業的自己： $F(2,1240)=19.151, p=0.00$ 」「支援充足感： $F(2,1245)=12.19, p=0.00$ 」の各項目が有意であった。

(4)「施設職務をソーシャルワークであると感じる」と関連する要因

「施設職務は、ソーシャルワークであると感じる」という設問に対する回答を目的変数、その他の項目の回答、及び、勤務年数、年齢、保持する資格を説明変数とする重回帰分析を行った。変数は、強制投入とした。重回帰分析の結果、重決定係数は.275であり、1%水準で有意な値であった。説明変数から目的変数への標準偏回帰係数のうち、有意であったものは、「利用者の経歴を考慮した支援： $\beta = .081, p < .01$ 」「利用者についての情報共有： $\beta = -.072, p < .05$ 」「支援計画に利用者の思いを反映： $\beta = .099, p < .05$ 」「申し送り情報を考慮して支援： $\beta = -.075, p < .05$ 」の各項目であった。

5. 考察

今回の調査で、インタビュー調査より抽出した生活型施設の専門性について、勤務経験を経ることにより獲得される項目があること、反面、勤務経験には左右されない項目があることが確認できた。また、利用者の経歴への考慮、情報共有という、利用者の生活の全体性への配慮、支援計画に利用者の思いを反映させるといった、利用者主体の姿勢が施設職務としてソーシャルワークと関連することが示唆された。

文献1) 山辺 朗子(2011)ジェネラリスト・ソーシャルワークの基盤と展開, ミネルヴァ書房。